

レーニンとローザの論争の現在的とらえ返し

——自然発生性への依拠と拝跪の弁証法——

「ロシア革命」のレーニンと「ドイツ革命」のローザ・ルクセンブルクの間に論争がありました。マルクス派の多数派である、マルクス・レーニン主義の系譜では、レーニンが正しくローザは間違っていたとされているようです。わたし自身も、組織論運動論のところでレーニンの外部注入論や中央集権制を批判しつつも、かつては民族問題の民族自決権ではレーニンが正しくローザは間違っていたとしていたし、ローザの「資本蓄積論」がわたしが展開しようとする反差別論の基調のようなことになっていたとしつつも、なぜ、ローザは、被差別当事者として被差別事項を多く持っていたにも拘わらず、何故それを具体的運動として展開しなかったのかという批判をしていました。これについては、論攷の最後にローザのとらえ返しとして展開してみます。

I. レーニンからするローザの誤りの指摘

さて、レーニンのローザ批判のまとまった論攷は、ローザ・ルクセンブルクの解説書の中でわたしは読んでいます。「たわしの読書メモ・・・ブログ 545/パウル・フレーリヒ/伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルク その思想と生涯』東邦出版社 1974 431-2P」

(レーニンの著作からのフレーリヒの引用)「パウル・レヴィ (ローザとリープクネヒト亡き後にドイツ共産党を牽引したひと) は、いまローザ・ルクセンブルクがまちがいをおかしているまさにその著作を再版することによって——ブルジョワジーに、したがってその手先である第二および第二半インターナショナルにとくに奉仕しようとのぞんでいる。われわれはそれに対して、ロシアのある適切な寓話の一句でこたえておこう。それは、鷺は牝鶏よりひくくおることもあるが、しかし牝鶏はけっして鷺のように飛ぶあがれない、ということである。ローザ・ルクセンブルクはポーランド独立問題で誤りをおかし (論点①)、一九〇三年にはメンシェヴィズムの評価で誤りをおかし (論点②)、資本蓄積論の理論で誤りをおかし (論点③)、一九一四年七月には、プレハーノフ、ヴァンデルヴェルデ、カウツキーその他とともに、ボルシェヴィキとメンシェヴィキの統合を擁護するという誤りをおかし (論点④)、一九一八年に獄中の著作で誤り (論点⑤) をおかした (ただし、彼女自身、出獄後、一九一八年の終りから一九一九年の初めにかけて自分の誤りの大半を訂正した (論点⑥))。しかしそうした誤りにもかかわらず、彼女はやはり鷺であったし、いまでも鷺である。そして彼女についての記憶が、つねに全世界の共産主義者にとって貴重であるだけでなく、彼女の伝記と、彼女の著作の全集 (このことでは、ドイツの共産主義者は、がまんのできないほど立ちおくれしており、ただ、彼らの苦難の闘争での前代未聞の多くの犠牲ということで、わずかにいくらか言いわけされるだけである) は、全世界の共産主義者の多くの世代を教育するうえに、もっとも有益な教訓となるであろう。<一九一四年八月四日以後、ドイツ社会民主党は悪臭紛々たる屍である>——ローザ・ルクセンブルクのこの名文句とともに、彼女の名は、世界労働運動の歴史にのこるであろう。」(「政論家の覚え書」、一九二二年二月末、『レーニン全集』第十三巻、大月書店)」

論点を緑の斜文字で出しています。それに沿って、レーニンとローザの対話を試みます。

論点①—民族国家の自決権・独立運動の問題

これは、民族自決権の問題で、レーニンとローザの間で民族自決権を巡っての論争があったことを指摘しています。(これについては読書メモの(註7)で、詳しく論じているのですが、ここで内容的に織り込んでいたので割愛します。)ローザはインターナショナルリズムで、ポーランドに関しては、独立運動的なことに否定的でした。このあたりはレーニンとの民族自決権を巡る論争で、レーニンは、抑圧する側の民族として被抑圧者の自決権を認めるということ、ローザは、抑圧される側の民族として、自国のブルジョアジーにからめとられるという批判があったようです。ただ、ローザのレーニンに対する超中央集権主義批判で、中央集権主義と民族自決権はアンチノミーになるという内容の批判をしています。(ここのところ、実は冒頭に書いたように、かつてのわたしは、ローザのインターナショナルリズムを評価しつつ、階級闘争一元主義にも陥っているとし、そもそもローザもレーニンも差別の階級支配の道具論に陥っていることを押さえ、ローザが個別差別の問題をとりあげないことを批判していました。)

著者・フレイリヒのローザのポーランド問題への評価—「ローザ・ルクセンブルクの方は、ポーランド問題ではまったく正しかったが、しかしポーランド民族問題の解決にのみ妥当なその方法を不当に一般化した点で誤っていた、というレーニンの総括的判断はまさに正鵠を射たものであった。」58P があります。ただ、レーニンの民族自決権は超中央集権主義に照らすと虚構になっていきます。その矛盾のなかで、スターリンの民族理論につながっていきます。ローザも必ずしも独立運動一般を批判したのではなく、むしろゆらぎというか、現実的なとらえ返しで、実際の利害をとらえ返し、インターナショナルリズム的のどういう方針をだしていくかという観点があったようです。これは著者・フレイリヒの次の文として示されています。「ローザ・ルクセンブルクはポーランド民族問題やトルコの抑圧のもとにあった諸国民の民族問題を解決することを通じて、マルクスの国際政策の命題をくつがえした。そしてそのことによって、彼女は自分がマルクスの本当の学徒であることを示した。というのは偉大な思想家のエピゴーネンと創造的な継承者を分つのは、前者が師の思想の既成の結果だけを金科玉条と墨守して、状況の変化に頑として逆らうのにたいし、後者は偉大な先達者の真の精神を学んで、既成の結果そのものにたいしても自由で批判的な眼をもち、師がしたのと同様に、その方法を異なった状況に適応させて変更させていくところにあるからである。」59P

論点②—レーニンへの「超中央集権主義」へのローザの批判

これは、主にローザのレーニンへの「超中央集権主義」批判として展開されたことで、この時のメンシェヴィキにはトロツキーも含まれていました。ただ、トロツキーはすぐにメンシェヴィキを離れ、1917年のロシア革命の頃には、ボルシェヴィキに合流しています。ローザの「ロシア革命論」の後のレーニンのいうローザの自己訂正(論点⑥参照)、そしてレーニン自体の、中央集権主義に対する変化も照らして(※)、これはとらえ直すことです。

ローザも中央集権主義自体は必要としています。ただし、このことも情況規定的で、さらに現代的に弁証法的にとらえ返すことだとわたしは思っています。

※レーニンが、ローザから自分の「超中央集権主義」として批判されている本の出版を、革命後は過去の論争過程の本として出版を渋ったという話にもつながっています。

論点③—レーニンの『資本蓄積論』の批判のとらえ返し

これは、わたし自身、ローザの拡大再生産論を巡るマルクスへの批判のとらえ返しをしていました。マルクスの『資本論』第二巻の拡大再生産論の論理的抽象から上向していく手法をローザが読みとれず、マルクスの不備として、いきなり「帝国主義論」にリンクさせたことを指しているようなのです。しかし、ローザの「資本蓄積論」とレーニンの「帝国主義論」に関しては、レーニンの「帝国主義論」は、植民地支配時代の「帝国主義論」で、ローザの「資本蓄積論」の継続的本源的蓄積論は、今の社会でも、特に反差別共産主義論的観点から生きて使える理論になっているとわたしは押さえています。

論点④—レーニンからするローザのメンシェヴィキ批判の不徹底

これは、当時の剥き出しの暴力支配の中で、マルクス以来の（武装蜂起→）権力奪取→プロレタリア独裁論から来ていることで、レーニン自身が現実主義的にロシア革命のソヴィエトによる権力の掌握というところでメンシェヴィキ（左派）との共闘は完全にきいていなかったもので、そのことも含めて考えることです。また、今日的にレーニン主義的外部注入論とか中央集権制を批判したところで何がメンシェヴィキ批判として残るのでしょうか？ それは間違いなく、国際主義というところで、メンシェヴィキ、とりわけ右派がどうなっていくのか（左派の中にはメンシェヴィキと袂を分かった国際主義派のトロツキーがいます）、ということがあり、そして、その国際主義というところではレーニンとローザは共鳴し合っていたのです。

論点⑤—レーニンが批判するローザの「ロシア革命論」

これは「ロシア革命論」の話です。ローザはこれを出すことに迷いがあったようで、しかも、なかで展開していたことを一部運動の中で撤回・修正しています。（論点⑥）につながっています。（運動の中での修正に関しては、これを引用している読書メモの（註 26）参照。ここでは内容的に「補論」で織り込んだので割愛）

論点⑥—何を撤回し、何が維持されるのか？

何を撤回したのか、何を維持したのか細かい押さえが必要です。いずれにしても当時の運動の実践的なところで起きていたこと、一部は、ローザの押さえ損ないもあると押さえたところでの、現在の実践的なことに照らした検証も必要になることです。この話はⅡに繋がります。

補論—「ロシア革命論」におけるローザとレーニンの対話

組織論的なところでのローザのレーニン批判は、後のスターリン主義的誤謬と危惧をローザが予見したことに繋がっています。ローザとレーニンの対話は、冒頭に挙げた読書メモの中の切り抜きメモで指摘していますので、補論としてあげておきます。

「このようにローザ・ルクセンブルクは、十月革命とその基本原則を最高級の言葉で称揚したが、しかし同時に、農地改革、民族自決権、民主主義とテロルの問題では、ボルシェヴィキの政策を批判した。」332P・・・(文末のワルスキーの本)では、四つ上げています(丸囲み数字で指摘)。

ローザ①「しかし、この独裁は民主主義の適用方法にあるのであって、その廃棄にあるのではない。ブルジョア社会において“正当に獲得された諸権利”や経済関係——これなしには社会主義変革は実現されえない——にたいする精力的な、断固たる侵害を意味するものではない。」「・・・・・・・・プロレタリアートはただちに、このうえなく精力的に断固して仮借なく社会主義政策に着手すべきであり、そうせざるをえない。つまり独裁を行なうのであるが、これは階級の独裁であって、政党や派閥の独裁ではない。階級の独裁、すなわち、無制限の民主主義の中で人民大衆が活発に、何ものにも妨げられずに参加するもっとも開放的な階級の独裁なのである。」337P・・・ローザの独裁論

ローザ②「われわれはつねにブルジョア民主主義の政治的形式から社会的核心を区別してきたこと、またつねに形式的平等や自由という甘い皮の下に、社会的不平等や不自由という苦い実があることを暴いてきたということにすぎず——それも自由と平等を投げ捨てるためにではなく、労働者階級をそれにむかって励まし、皮に満足せずに、政治権力を獲得することによって、これを新しい社会内容でみたすためであった。権力を握ったプロレタリアートの歴史的使命は、ブルジョア民主主義のかわりに社会主義的民主主義を創造することであって、一切の民主主義を廃棄することではない。」／(著者の言)「つまりローザ・ルクセンブルクにとってプロレタリア独裁とは、民主主義の縮小ではなくして拡大であった。それより高次の民主主義であった。」338P

(ワルスキーの言としてのローザ③)「しかしまた、ローザ・ルクセンブルクは、古い社会秩序の解体に臨んで、膨大な課題をかかえ、しかも獲得した権力を維持するために、さまざまな敵とたたかわねばならぬボルシェヴィキにとっては、存在するあらゆる力を集中し、自由の制限によって目前の危険を排除し、必要な措置を上から指令することをせざるをえぬ、ということもよく知っていた。大衆の民主的活動の効用をのべた後に、彼女はつぎのようにつづけている。／「もし世界大戦や、ドイツ軍による占領や、これと結びついた一切の異常な困難というおそろべき状況下に苦しむことがなかったならば、ボルシェヴィキもまたかならずそうやったにちがいない。これらのおそろべき状況は、最善の意図もっとも美しい原則に満ちている社会主義政策のすべてを歪めずにはおかぬのである。」340-1P・・・?そもそも苛酷な状況から規定されて、それだから起きたこと

(ワルスキーの言としてのローザ④)「ただ、彼女が警告しようとしたことは、かれらが苦しまぎれにやったことを美德にし、この宿命的な条件にしいられて仕方なくとった戦術を、すべて理論的に固定化して、社会主義戦術の模範として、国際プロレタリアートに模倣させようとするのであった。」341P

(ワルスキーのローザ「ロシア革命論」に関するまとめ)「ローザ・ルクセンブルクは、こ

のロシア革命論の草稿を完成しなかった。その理由は、ただ時間がなかったためというだけのものであろうか？ おそらくその他に、彼女自身、自分の意見が本質的な点で変わりつつあることに気づいていたこともあったのではなかろうか。いずれにせよ、その数週間後に、彼女は多くの重要な点を修正した。彼女のポーランド時代以来の同志であったアドルフ・ワルスキーは、一九一八年の十一末か十二月初めに、彼がボルシェヴィキの政策に疑念をのべると、ローザ・ルクセンブルクはつぎのように答えたと伝えている。／「・・・・・・・・あなたがもたれているような留保や不安を、わたしももっていましたが、もっとも重要な問題に関する不安はすててしまいました。・・・・・・・・したがって、ロシアのテロルは、なによりもヨーロッパ・プロレタリアートの弱さのあらわれなのです。たしかにいまつくりだされている農業関係は、ロシア革命にとってもっとも危険な、もっとも弱い点です。しかし、この場合にも、どれほど偉大な革命も、歴史の発展が許すことしかできないという真理があてはまるでしょう。この弱点を正しうるのもまたヨーロッパ革命だけです。そしてそれは起こるでしょう！」（Ａ・ワルスキー『革命の戦術的問題にたいするローザ・ルクセンブルクの態度』一九二二年 ハンブルク）」 342-3P

II. ローザ・ルクセンブルク理論の現在的とらえ返し

自然発生性への依拠と拝跪の弁証法

レーニンのローザへの批判、そして左翼総体からする批判も、ローザは自然発生性への拝跪に陥っているということになるのだとわたしはとらえ返しています。また、「成功した」ロシア革命、敗北しつつあるドイツ革命（敗北したドイツ革命という）図式に、ローザ自身もその周辺もとらわれていったことがあります。スパルタクス団自身が方針が定まらず、レーニンのロシア革命の影響もあって、武装蜂起→権力奪取というところに惹きずられていったのですが、今日的にとらえると、わたしは、ロシア革命は、労農独裁から社会主義の定立にいたらず、国家資本主義にしかならなかった。そして、それはアーレントが「社会主義の定立に失敗した敗北せるロシア革命」を「社会主義の定立」ととらえそこなったところから、他のファシズムの流れも「全体主義」ということで一括して規定してしまった錯誤があります。そこから、自然発生性への拝跪を批判するレーニン主義的革命論が「左派」主流派として定立していった歴史があるのです。

反差別論からレーニンとローザの論争をとらえ返す

レーニンの「外部注入論」や「中央集権的組織論」は、反差別論を展開するわたしにとって、そして、そもそも運動の中の関係性が、将来の社会のあり方を決定するという意味においても、ありえないのです。ただ、ローザにも自然発生性への拝跪と言われる、組織論がないと批判されることがあります。当時は、まだ反差別という観点が、個別被差別の課題、すなわち、民族・人種差別、女性差別、一部障害差別といったようにしかとらえられていず、反差別論というところから、組織論が展開されていませんでした。今日的に言えば、運動論的に上下関係のない、ネットワーク論や党—後衛論といったようになるのだと思います。その上で、ローザの革命主体を民衆(とりわけ被差別民衆)に措く、自然発生

性への依拠論が活かされるのだとも思っています。

ローザは何故個別反差別運動を展開しようとしなかったのか？

わたしは、ローザ学習をしていた当初からつい最近までも、ローザは個別被差別当事者性を、ユダヤ人、植民地ポーランド生まれ、女性、「障害者」と数多く抱えさせられていたのに、なぜ、個別反差別闘争を展開しなかったのかと批判的にとらえていました。ですが、シングルシュエ的取り組みが何をもたらすか、ということをロシア革命におけるユダヤ人グループの運動とかでとらえていたところで、国際主義という普遍性をむしろ突き出していたのだと思います。これは今日的には、ひとつの課題をシングルイシュー的にとらえたところで展開する運動が、他運動を排外主義的にとらえたり、一種のナショナリズム的になっていくことをとらえたところでの普遍性の突き出しとしてローザは展開しようとしたのだと考えています。これは今日的に、普遍性と特殊性の弁証法的止揚というところで個別性をとらえ、普遍性をとらえ返したところでの個別被差別課題での弁証法的展開といわれることで展開していくことになるのでは、思えるのです。

反差別運動の総体的・普遍的観点をもった個別差別運動の展開を！

その中で、そもそも階級闘争か反差別闘争か、という二分法的なとらえ方をしていたこと自体が間違いではないかとも考え出しています。階級闘争も共有財・とりわけ生産手段の所有からの排除（という私有財産制）と労働力の価値を巡る（労働力という物象化され、個人に内自化された能力という錯誤の上に立つ）ヒエラルヒーという反差別の課題なのです。マルクスはプロレタリア革命論やプロレタリア独裁論を展開したのですが、今日的には、ネグリ／ハートのマグニチュード論やグラムシ発のサヴァルタン論など、被差別民衆（その中で数少ない多数派・マジョリティの労働者階級も重要な革命主体として押さえる必要があるのです）を革命主体としておく、新しい革命論が必要になっています。

今、戦争とファシズムの隆起という時代において、右派ポピュリズムが拡がっていつている時に、差別というところから起きている事態をとらえ返し、反差別ということを軸に据えた運動が必要になっています。ローザの継続的本源的蓄積論は、そのことを押さえるところで重要な意味をもっているのだと更めて提起しておきたいとこの文を興しました。

（み）

（「反差別原論」への断章」（107）としても）